

# 生存説が残る

## 絶世の美女、

## お市



浅井長政室 [織田氏] 画像 (東京大学史料編纂所蔵模写)

**戦** 国時代きつての美人として、また、運命に翻弄された悲劇のヒロインとして知られるお市。実は、彼女の生存説が伝わっています。

お市は、天文16(1547)年に織田信長の妹として、尾張国に生まれました。実家の織田家は、越前国、織田庄(現在の丹生郡越前町織田)にある劔神社の神官だったといわれ、その後、室町幕府の有力者、斯波氏の家臣として尾張の守護代を務めるようになり、信長の代に至りました。お市は、信長の命で、永禄10(1567)年、近江(滋賀県)

の国と深い縁で結ばれ、次女の初が後の小浜城主、京極高次に嫁いだほか、三女の江と將軍徳川秀忠の娘、勝姫は福井藩第2代藩主松平忠直に嫁ぎました。

お市には生存説があります。北庄城が落城する前夜、お市は、城の裏手を流れていた足羽川から脱出し、勝久寺(現在の坂井市三国町)に落ち延び、寺の離れに潜伏した後、三國湊の豪商、森田家に匿われたというのです。森田家は、信長の支援者で、織田家を財政面から支えた商人の一人でした。その後、森田家内の旧浅井家家臣の手引きで、お市は近江の国に移ります。さらに、同じく浅井家の残党の浅井治郎左衛門の案内により、伊賀の下友田に移り住み、慶長4(1599)年に53歳で没します。浅井治郎左衛門はお市の死後、茶毘にふされたお市の喉仏を保管し続けたということで、その喉仏が現在も、三重県伊賀市の浅井長政供養塔に納められているということです。

この生存説が生まれた背景について、「それからお市の方―北ノ庄落城異聞」の作者、中島道子氏は、秀吉の目を恐れて、闇から闇へ生きざり続けたのは、浅井の遺臣ではない

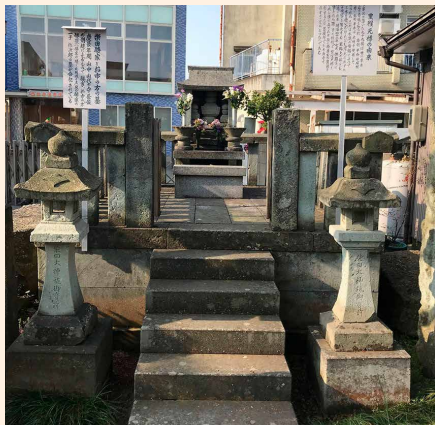
の小谷城主浅井長政に嫁ぎ、三人の娘(茶々、初、江)をもうけます。

信長の越前攻めに端を発した戦いで、長政と死別した後は、柴田勝家と再婚しますが、勝家が羽柴秀吉に攻められ、天正11(1583)年4月24日、越前北庄城で自害します。37歳でした。お市の辞世の句は「さらぬだに打ちぬる程も夏の世の別れを誘う時鳥かな(時鳥はあの世からの鳥というけれど、そうでなくても寝ているはずの夏の世に、この世からの別れを告げているようだ。)」と伝えられています。お市は、その死後も、越前・若狭

かと述べています。浅井の残党は、結束を維持し続けていくため、お市という存在を必要とし、生存説を作り上げたのかもしれない。

### 関連史料・ゆかりの地

#### 西光寺



柴田勝家の菩提寺、西光寺。境内には、勝家とお市の墓があります。秀吉軍に攻められ、北庄城で命を絶つに先立ち、3人の姉妹の将来などを住職に託したと伝えられています。勝家の書や刀剣などを展示する柴田勝家公資料館があります。

【住所】福井市左内町8-21 (JR 福井駅西口から福井鉄道乗車、足羽山公園口下車徒歩3分)